

26. ところで、その六か月目に、御使いガブリエルが、  
神から遣わされてガリラヤのナザレという町のひとりの処女のところに来た。
27. この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリヤといった。
28. 御使いは、はいつて来ると、マリヤに言った。  
「おめでとう、恵まれた方。  
主があなたとともにおられます。」
29. しかし、マリヤはこのことばに、ひどくとまどって、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ。
30. すると御使いが言った。  
「こわがることはない。  
マリヤ。  
あなたは神から恵みを受けたのです。
31. ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。  
名をイエスとつけなさい。
32. その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。  
また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。
33. 彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。」
34. そこで、マリヤは御使いに言った。  
「どうしてそのようなことになりえましょう。  
私はまだ男の人を知らないのに。」
35. 御使いは答えて言った。  
「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。  
それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。
36. ご覧なさい。あなたの親類のエリサベツも、あの年になって男の子を宿しています。  
不妊の女といわれていた人なのに、今はもう六か月です。
37. 神にとって不可能なことは一つもありません。」
38. マリヤは言った。  
「ほんとうに、私は主のはしためです。  
どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」  
こうして御使いは彼女から去って行った。

## 説教

これは、イエスさまの母となるマリヤの告白です。この一言の故に、マリヤは、歴史を超えて、世界中のキリスト者にとって、信仰と従順の最も良き模範と慕われるようになりました。この時若干12歳のマリヤが、果たして自分の告白の意味が十分に理解できていたかは、はっきり言って疑わしいと思います。でも、時代を超えて私たちの心を打ってきたのは、マリヤの神さまへの絶対的な信頼です。この後、マリアの生涯には数々の苦難が降りかかることとなりますが、それでもマリヤは揺るぐことなく、すべてを神さまに委ねて、

神さまのみこころを受け入れて、冒頭の告白をしたのでした。

御使いはマリヤのいる部屋に入ってくるなりマリヤに言います。

「喜びなさい、

(主に)愛された方、

主があなたと共におられます(28 直訳)。」

この言葉にひどく混乱し、葛藤するマリヤに対し、御使いはおかまいなしに続けて言います。

「恐れるな。

マリヤ。

あなたは神からの恵みを見出したのだ。

見よ、あなたは身ごもって男の子を産む。

その名をイエスと名付ける。

彼は偉大になり、

いと高き方の息子と呼ばれ、

神なる主は彼の父ダビデの王権を彼に与える。

彼は王として永遠にヤコブの家を統治し、その王国は終わらない。」(30~33 直訳)

これによると、マリヤは、偉大な、天の父の息子、神の国イスラエル王国を永遠に支配する御国の王を産む、というのです。35 節の御使いの言葉も考え合わせると、その子は、この世に属さず、神の側にある「聖なる者」、さらにはっきりと「神の子」と呼ばれます。そのような子を産むとは、人類最高の榮譽のように思えます。地上の権威に飽き足らないローマの皇帝は、自らを「神々の子」と呼ばれることを欲しました。偉大な者となり、地上の王国を治める権力者となり、さらには天と地とを永遠に治める「神の子」となることは、時代を超えた人類の夢と言えるでしょうか。御使いは、マリヤが永遠の御国の王、聖なる神の子を産むと予言します。後のエリサベツの言葉通り、主の母に選ばれるとは何という幸いでしょう。後のマリヤの讃歌でマリヤ自身の口によって歌われるように、場所と時代を超えて最高に幸いなことです。

とは言っても、やはり、ただ幸いばかりが待っているわけではありませんでした。人類最高の幸せに恵まれたはずのマリヤでありましたが、この後は試練が続きます。まず、この時すぐさま待ち受けていた試練は、婚約者(と言っても、事実上、既に結婚した伴侶)ヨセフによらずに子を身ごもるという事実です。律法によれば姦淫の罪として石打ちの公開死刑に処されます。それをクリアできても、その後、住民登録のためベツレヘムの家畜小屋でイエスさまを出産しなければなりません。生まれてやれやれと、ベツレヘムでゆっくり親子水入らずで過ごしていたら、間もなくヘロデ王の刺客がイエスさまを殺しにやって来て、遠いエジプトへ逃げなければなりませんでした。ヘロデが死んで、ナザレに帰って、およそ三十年間一緒に幸せに暮らしていたと思ったら、その間に夫のヨセフは他界し、今度は息子イエスさまが三年間の公生涯に入り、三年後には権力者に捕まって、皆の知っている前で十字架に磔にされて処刑されるのをその「そばに…立って」見なければなりませんでした。僅か 33 歳にして、です。ですから、神殿でシメオンがマリヤに言ったように、マリヤの生涯は「剣があなたの心さえも刺し貫くでしょう」という生涯でもありました。

しかし、マリヤがこれから次々と死ぬほどの苦難に直面していくことは、御使いは全く少しも言及しません。どうしてでしょうか。少しはこのことにも言及して、マリヤに心の準備をさせておいた方がよいのではないのでしょうか。どうして御使いは何も言わないのでしょうか。というより、どうして神さまは、御使いを通して、マリヤの苦勞をお知らせにならないのでしょうか。それは要するに、知らなくてもいいからです。知る必要がないからです。神さまのために苦勞するということは、知る必要がないということです。否、知ってもいいけど、たとえマリヤがそれを予感し、予測し、シメオンを通して知ったとしても、それでもやは

り御使いの言葉通り、マリヤは幸いです。特別に愛されています。つまり、苦勞も幸いなのです。何故か？何故なら、その苦勞は主のための苦勞であるからです。

御使いは一連の預言の最後に、こう断言します。

### 37. 神にとって不可能なことは一つもありません。」

「神からの一切のことばは無力ではない(37直訳)。」

神のことばを信じなさい。本当にそうなるのですか？あなたの言っている通りになると、私は石打ちにされてしまうんじゃないですか？大変な苦勞に満ちた人生になるんじゃないですか？そんなことは邪推です。不信仰です。神のことばが語られて、それをそのまま受け止めることなく、「いや、あなたはこう言っているけれども、でも現実はその甘いなんじゃないよ。」「大変なこともいっぱいあるでしょ。」「いろいろと苦勞することを私に隠して、うまく騙そうとするでしょ。」このような憶測、推測、反論は、はっきり言って、神のことばをないがしろにし、無力にする、悪魔の惑わしです。神のことばに言われていないことをあれこれ邪推して、結局は信じない、受け入れない、実行しないということは、要するに、「神のことばは無力だ、意味がない、力がない」と言っているようなものです。これが人をダメにします。人を滅ぼすのです。

神が言われていないことをあれこれ邪推するのではなくて、神が言われたことをそのまま信ずべきです。神が幸いだと言われたら、その通り幸いなのです。恵まれていると言われたら、そうか、自分は恵まれているのか、と信じるべきです。神のことば中心に自分の置かれている状況を理解すべきです。なぜなら、私たちは愚かで無力だけれども、神さまは力あるお方だからです。神のことばは無力ではない。ことごとくその通りに成就します。

苦勞はするでしょう。でも、その苦勞は、幸いな苦勞です。その苦勞を味わわなかったら、神の栄光を見ることができない苦勞です。必要な苦勞です。マリヤが神の栄光を見るためには、どうしても必要な苦勞です。この苦勞のおかげで、マリヤはキリストの母となることができました。劇的なキリストの生涯を最も間近で目撃することができました。そして、最後は、死人の復活という人類最大の奇跡を最も間近で目撃して、神の栄光を見るために、必要な苦勞です。キリストを間近で見て、終わりの日の復活も目の前で見たのです。天国のような生涯です。否、天国そのものです。神を見るときは、天国に於ける最高の幸せです。これ以上の幸いはありません。キリストを見た、終わりの日の復活も見た、あらゆる人類に先駆けて、彼女は見たのです。まさに、この後のことを考えても、マリヤは幸いでした。天使のことば通りに、マリヤは最も幸いな、恵まれた生涯です。

マリヤは、その通りに成就すると言われた神のことばの通り「この身になりますように」と答えたのでした。一切の葛藤、思い煩いをすべて主に委ねて、その通りに成就すると言われた神のことばの通り「この身になりますように」と答えたのでした。

### 38. マリヤは言った。

「ほんとうに、私は主のはしためです。

どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」

「ほんとうに、私は主のはしためです。」この直訳は、「見てください、(私は)主の奴隷です。」です。しかも、奴隷の中でも最下層の奴隷だと告白しているのです。新約聖書には「しもべ」「奴隷」を意味する言葉がいくつか登場します。例えば、「仕える者」を表す「ディアコノス」、元来は「子供」を表す「パイソ」、「住む」という意味のことばから派生した「オイケテース」(住み込み奴隷)、元来は「少女」を表す「パイディスケー」(使徒 16:16「女奴隷」)がそれです。でもここでは、マリヤは自分のことを「ドゥーロス」という、奴隷の中でも最下層の奴隷を表現する言葉を使って告白しているのです。これは決して月並みの表

現ではありません。言葉のあやでこんなことを言っているではありません。生半可な覚悟で言っているではありません。「**見てください、(私は)主の奴隷です。主のドゥーロスです。**」こう告白する時、マリヤは、これ以上ないほどの服従を表現し、神さまへの絶対服従を誓っているのです。「あっちへ行け」と言われれば、あっちへ行きます。「こっちへ来い」と言われれば、こっちへ来ます。「水の中に入れ」と言われれば、喜んで入ります。「死ね」と言われれば、死にます。それが「奴隷」なのですから、本当にいのちを賭けて主に従います、そういう覚悟で「**ほんとうに、私は主のはしためです。**」「**見てください、(私は)主の奴隷です。**」マリヤはこう告白しているのです。

御使いは「恐れるな」と言いました。正確に訳すと「恐れ続けるな」です。これから先、どんなことがあっても恐れてはならないという意味です。

私たちは、このマリヤのように、主のための苦難を、恐れることなく、すべてを主に委ねて、主の御心を全うして生きていきたいと願います。